

《2006年3月例会報告》

【日 時】2006年3月10日（木）19:00～21:00（→その後「ルン」～2:00頃）

【会 場】筑波大学附属高校体育館1Fミーティングルーム

【テーマ】ラジオで伝えるフットボール

【話題提供者】小林達彦（ジャーナリスト／紹介者：両角晶仁）

【参加者（会員）】相原正道（筑波大学大学院体育研究科） 北岡真幸（同志社大学講師／元朝日放送スポーツ局） 嶋崎雅規（帝京高校） 中塚義実（筑波大学附属高校） 本多克己（FCJAPAN） 宮崎雄司（サッカーマニア編集長） 室田真人（NPO 法人九曜クラブ／中央大学） 両角晶仁（totoプロデューサー）

【参加者（未会員）】加藤貴志（東京ドイツ文化センター） 小林達彦（） 桜井克一（ワールドサッカーファン） 高松由美子（サッカーファン） 橋本綴子（OL） 早川絵美（OL） 松木淳（筑波大学体育専門学郡4年次）

【報告書作成者】室田真人

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

ラジオで伝えるフットボール

小林達彦（ジャーナリスト）

■話題提供者自己紹介

名前の方は、小林達彦と申します。プロフィールは、前にメールで連絡が行っている（最後に載せてあります）とのことですので、簡単にします。今はフリーになっていますが、かつてはニッポン放送、ラジオ局に勤めていました。テレビではありません。スポーツのアナウンサーとして約40年強勤めていました。そこでは野球の中継が多かった関係で、甲子園に何度も行き、ここにおられます北岡さんとも一緒に仕事をしたことがあります。

■はじめに

さて、最初にお断りしておきますが、私の話はかなりバラバラになったり、前後しますのでお許し頂きたいと思います。と言うのも、スポーツアナウンサーは目の前の動きを即座に喋るわけですから、脈絡もなければ、起承転結もあるのかないのか・・・。話があっちゃこっちゃ行っちゃうと思います。

■テレビとラジオ

まず、きょうは「ラジオ」の話を・・・ということで皆さん、今はラジオを意識していらっしゃると思います。しかし、この前提がなく、ただ「放送」と言うとイコール、テレビになってしまうのが普通ですね。ラジオのイメージを持たれる方は殆どいらっしゃるのではないのでしょうか？ ラジオとテレビの違いなどについては、後程お話ししたいと思います。スポーツのアナウンサーの立場か

らすると、テレビのアナウンサーは実況が出来ないのですよ。「実況」というのは動きに合わせて喋るんですが、テレビは画面が実況をしてしまうんで、アナウンサーは説明と解説とのやりとりだけなんです。

一方、ラジオのアナウンサーは実況、説明、解説との会話と画面に振り回されることなく自ら演出しなくてはなりません。ところが世の中では、テレビのアナウンサーが有名であって、スター扱いをされる。アナウンサーと名前がついているのに喋りより容姿が優先されている現実ですね。女子アナで日本語が満足に喋れない方を見受けますが、それだったら『アナウンサー』の名前でなく別の呼び方にして欲しいと思っているのはラジオアナのヒガミ根性でしょうか？ラジオのスポーツアナのプライドは高く、なかには、テレビアナを見下しているのもいるようです。（そんなにムキになることではないですよネ）

さて、話を元にもどしましょう。「放送」と「Jリーグ」の関係ですが、テレビは地上波、衛星をNHKが独占契約しており、BSデジタルはTBS、ナビスコをフジ、J2をスカパーがそれぞれ独占契約をしています。Jリーグにとってはこのテレビマネーが最大の収入源になっているわけで、このお金が各クラブに分配され、チームが運営されています。お金が入るものだから、これはチェアマン以下、下の下まで、テレビのことしか頭になく、ラジオの方になかなか耳を傾けようとはしません。当たり前といえば、当たり前なんですけど・・・！

ラジオの方はJリーグ発足以来ニッポン放送が独占契約しています。ラジオ局の規模はテレビとは比べ物になりません。ラジオ局の経営自体、収入はほぼ横ばい状態で全然儲からないのですよ。メディアというカテゴリーで見ると活字媒体はほぼ飽和状態です。電波もテレビ関係はかなり充実しています。そんな中、ラジオにはかなりの空席があるんですね。ラジオの活用は儲からないのは事実ですけど、Jリーグにとって損はないし全くと言っていいほどデメリットもありません。簡単にできるのも魅力だし、だいいちサッカー協会の憲章にもJリーグの憲章にも“普及”とうたわれていますよね。だったらラジオを使わない手はありません。ですから鈴木チェアマンと鬼武専務理事を説得してラジオの中継をとにかく増やそうとしているんです。最初にお金のお話をしたら前に進まない、ということを進めております。

実は、93年からニッポン放送が独占放送をしているため、逆に動きがつかないのですよ。ニッポン放送の許可を得ないと他局は放送できません。なぜこうなっているのかというと、J発足時、Jリーグ側はラジオに関してよく分からなかったもので、ニッポン放送が声をかけたら、言い方は悪いんですが、丸投げをしたのですよ。だから、Jリーグは儲からない、分からないラジオに関して足掛け14年なんの修正もしていないのが現状です。実際、今年で14年目に入りますが、ラジオの中継本数は初年度からあまり変わっておりません。チーム数が増えてますのでパーセントで言えば50パーセント台で上下しています。全試合数の約半分しかラジオで中継していないということです。

それから、東京ではあまり、感じられませんが関西地区での「Jリーグのラジオ実況中継」はちょっと調べただけでも、ここ5~6年一度も、どこの局もやってません。それと放送局側の都合もありますねえ。野球シーズンに入りますと野球優先になります。といいますのも、野球のスポンサーの方がはるかにいいお金を出してくれます。一方、サッカーのスポンサーはあまり出してくれない。それに、サッカーは週に1回か2回しかないということ。つまり、ほぼ毎日ある野球はラジオに非常に向いたコンテンツであるということもありますね！

そういったなかで、サッカーのラジオ放送を増やそうという努力をしていますが、ここですこし、外国の例をあげてみましょう！アジアはだいたいどちらかというと、韓国もそうだし中国もそうなんですけど、ラジオよりもテレビの方の興味が強い。日本とほぼ同じと言えます。ところが南米でもヨーロッパでもスタジアムに行ったら、ラジオも持ってくる方が圧倒的に多いし、試合を見ながらラジオを聞いている方がものすごくいます。南米なんかは、ラジオ王国です。めちゃくちゃ局があります。1試合に数局が中継してました。アナ1人、解説（いない場合が多い）、レポーターがいますが30~40mのマイクコードを一人で引っ張りまわして放送してましたね。僕も実際通訳付きで、向こうのラ

ジオに出たことがあります、とにかく、3畳一間くらいの狭いところで簡単にやっています。

一方、テレビというのは、カメラが数台あって、中継車を用意するなど、大変大がかりですよ、北岡さん？

北岡：僕が一番大きいのをやったのは、日本対ブラジル戦で、97年長居で国際放送を兼ねていたんです。ESPNとブラジルの国営放送、テレビ朝日のスタッフなどを入れて、全部で約150人。

それは多い方だと思いますが、何だかんだアルバイトや下請けをつけたりして、普通は40人から50人くらい必要となります。

このテレビの大きさに比べ、ラジオ中継したいと、チームの人に話をもちかけると、ラジオの放送席がありませんから、という話をよくされます。しかし、ラジオというのは一人で持ち運び可能なくらいの荷物を1個か2個あればできて、長テーブル、3メートルくらいのがひとつあれば出来ちゃいます。解説、アナウンサー、ディレクター、それに技術が後ろに座って、最近では高性能になってきている電話線を一本引っ張ってくれば出来てしまうんです。放送室でなくても観客席の一部、3～5席あれば出来てしまうし、アナウンサーの隣に一般客がいても何の不都合はありません。かえって臨場感が出るってのもんです。費用もテレビに比べれば天と地、の開きがあります。後はやる気になるかどうかです。

■コミュニティFMについて

あつ、ところで話が横道に逸れますが、ラジオはどのような種類があるか知っていますか？局ではなくて、電波の種類のことです。

フローア：AM、FM、短波。

そうですね！短波というのは、国内でも聞けますが、主に海外用で、電離層まで電波を飛ばして反射を使って世界中に情報を送信しています。国内のコンテンツとしては、気象情報なんかはこれを使っています。

昔からあって一番身近なのがAM局、別名、中波局です。これはニッポン放送、文化放送、TBS、NHKラジオ第一、第二などです。この4局は出力100kHzの強い電波で、大体100kmの範囲、つまり関東地域をカバーすると思ってください。

FM局ですが、これはTokyo-FM、J-WAVE、NHKFMなどがあります。このFM局は大体、県域放送です。つまり、一県一局となっています。

それに最近と言ってももう大分たちますが、コミュニティFM局が注目されています。これはコミュニティという名前の通り、非常に小さな地域、例えば“ちょうふFM”という局の聴取カバー範囲は調布市、狛江、および三鷹、府中、小金井、世田谷の一部となっています。一応認可制度で、申請を出すと、電波の調べをするとすぐ出来ます。大阪や東京など大都市圏はFMが発達しているためになかなかないのですが、北海道内にはなんと19局、宮城県内は6局あります。楽天の本拠地になった仙台ですが、AMの東北放送は野球はやるがサッカーはなかなかやりません。ベガルタ仙台の試合を中継しているのが、このコミュニティ局で、しかも県内の3～4局とネットで結んで放送しています。ですから宮城県のほとんどの地域で聞くことが出来るんです。

去年の春先、僕が甲府に、ヴァンフォーレ甲府の放送をやってもらうため行ったんですが、山梨放送は、ナイター期間中は不可能だと・・・。実は山梨放送はAM局で、ネットワークができていながら、スポンサーと一緒に野球中継が来るために、断られてしまった。もう一つ、地元にはFM富士というのがあるんですが、ここは音楽専門局なんで乗り気がない。そこでコミュニティ局の「FM甲府」にお願いに行ったら、出力20Wなんで甲府市内だけしか聞こえない。でも前向きな返事をもらいました。

準備に時間がかかったようで、去年の後半戦からヴァンフォーレ甲府の中継を始めました。そしたら、例の柏レイソルとの入替戦です。ホームもアウエーも実況生中継をして大変大きな反響だったと聞いています。実は、スカパーも中継したんですが、ペイテレビなんて限られた人しか見ていません。小さいながら大ヒットだった訳です。

Jリーグは「地域密着」を謳っていますよね！だったら、このコミュニティFMはピッタリのツールではありませんか？

現在、詳細ではありませんが民放、NHKを合わせてAM局、FM局それぞれ約100局。

コミュニティFM局は約170局あり、増加の傾向にあります。

私はラジオで育った人間ですから、何とかしてラジオを利用すべきだと常々思っています。現状充分使っていません。私の最終目標はJリーグ、J1、J2全チームのホームゲームを全部中継したいんです。そうすれば、アウエーの試合は他局で制作したものをネット受けすれば済みます。その代わりに、ホームチーム一点張りの放送でアウエーのサポーターにとっては少々アタマに来るかもしれません。考え方でこれこそサッカーならではのHOME & AWAYの面白さじゃないですか？

さて、ラジオの中継諸費用ですが、AM局だと1試合（局によって大変大きな差があります）大体40~70万円位でしょうか。FM局はそれより少し安くなります。

コミュニティFMは最低1試合10万円、20万円あればまず赤字にはなりません。放送権料（ラジオなんて放映権料とは言いません）はJ1、J2と出力、で違ってきます。

コミュニティFMのJ2を中継する場合、放送権料はなんと、たったの5,000円です。10~20万円のスポンサーをつければ全て中継可能になるんです。

話はガラッとかわりますが、地震があると皆「ラジオ、ラジオ」となりますね。ところが、ラジオでも地域が広いとあまり有効に使えないんです。と言うのも、新潟地震の時、新潟地区にはFM新潟もあるし、BSNという新潟放送もある。ところが、山古志村の付近のためだけの放送をするわけには行かないんです。かなりやったけど、なかなか満足しない。しょうがないから国がそこにコミュニティFMをつくったのです。そして、すぐに放送で、「〇〇さん、お元気ですか？」や「〇〇さんこの前ケガをされていましたが、大丈夫ですか？」などの情報を発信していったんです。アパートの一室を借りて、マイク一本出して、やっていましたよ。簡単に出来るし、経費もあまりかかりません。それにラジオはPerson to Personなんです。

■ラジオとテレビの違い

ここからは改めてラジオとテレビの違いについてお話ししましょう。

まず、ラジオというのはイメージの世界であるということ。空想の世界なんです。一方テレビというのはそのものズバリなんです。見たまんまなんですよ。

例えば、ラジオで「向こうから美人が歩いて来ました」と言われれば、誰もが美人が歩いて来たと思像します。10人が10人、聞いた人その人の美人を思い浮かべますね。それがテレビだと、いくら美人と言ったって、10人中半分、いや半分以上の人が画面を見た途端、“なにが美人だよ！”と必ず反対する人が出てきます。自分のイメージと違ってしまうから仕方がないんです。

もう一つの例として、テレビでは女性をすっぽんぽんにすることは出来ないけど、ラジオではすることが出来るんですね。“えええ・・・！全部脱いじゃうの？あっ・・・！ホント脱いじゃったア！”

ことほどさように、ラジオをよく聞くと知らず知らずに頭を使っているんですね。テレビの方に怒られるかもしれませんがテレビを見ていると頭は殆ど使いません。ただポカーンと口を開けて見ている姿が目につかびませんか？早い話が、ラジオを聞くと頭がよくなります。テレビを見るとバカになる。むかし、大宅壮一さんという評論家が言っていましたよね！『1億総白痴化』と・・・！

また、テレビは薬で言えば即効性のある抗生物質のようなもので、効果がすぐ現れます。逆にラジオと言うのは漢方薬みたいなもので、効果が出るのに時間がかかるということです。効き目は遅いけど、ラジオというのは習慣性が出るのです。1回ダイアルを合わせると、テレビと違って、それほど

チャンネルを変えることはしないのです。だから、この時間にスポーツ中継があるとすると、毎回合わせるようになるのです。朝はかならず、今はテレビを見ている方が多いと思いますが、ラジオになったら、同じものを聞いていると思いますよ。なかなか他には移りません。ただ、その癖をつくるには時間がかかります。その代わり習慣がついてしまえば、その効果が出てきます。だから、ラジオというのは面白い効果があるということなんですね！

さて、テレビ中継の制限、ラジオ中継はフリーについてですが、一つの例として、アメリカ・メジャーリーグのドジャースの試合を取り上げてみます。ラジオ中継はあります。テレビ中継は、あることはあるんですが、地上波では見ることはできません。つまり、ペイテレビでしか見られず、普通の電波では見ることはできません。なぜかという、テレビを普通に中継してしますと、スタジアムに足を運ばなくなってしまうからだそうです。テレビの方が満足度は出ます。お金ももらえるけど、テレビ中心でやってしまうと、客がスタジアムに来なくなってしまうという論理ですね。反面、ドイツの人は逆にやった方がいいという理屈もあります。どちらが正しいとは一概には言えないのですが、テレビではなく、ラジオを聞くと、もっと知りたくなるのです。イメージの世界だけに、本当の世界が分からない。現場に行ってホンマもんを味わいたくなるんですよ。

ところで、野球はテレビで見るのと球場へ行って見るのとは確かに違いはありますが、それほど差はないと私は感じています。ところがサッカーは、ラジオやテレビでなく、現場で見ないと駄目ですね。例えば私は、日本シリーズで王さんが阪急ブレーブスの山田久志投手から後樂園で逆転スリーランを打って優勝したとき、冷静に座っていられるのですよ。ところが、サッカー日本代表対外国チームの試合を喋ったとき、「カズ、シュート！ゴオオオ〜ヘル・・・！」気が付いたら、隣のディレクターと抱き合ったりするんですね。

とにかくサッカーの興奮度と、野球の興奮度というのは違います。ですから、サッカーの興奮度を、テレビで伝えるのは難しく、あまり張り切ってやると、うるさいと言われてしまうのです。ラジオでやる分にはノイズと相まってとちょうどいいんです。これは、皆さん想像したら分かると思いますが。

そして、もっとラジオには重要なメリットがあります。「～ながら」ができます。つまり、「ながら族」です。運転しながら、仕事をしながら、聞くのはラジオだけです！

テレビの場合は「～しながら」画面を見ることができません。また画面を見ないと判らない。逆にテレビを見たら他になにも出来ません。ラジオに「ご覧のように・・・」はありません。

■最近、放送で気になること！

話は逸れますが、最近、スポーツ中継で感じる事、気になることがあります。ゲーム終了後のヒーローインタビューで選手に「ナイスゴールでしたあ！」とマイクをむけると、今の選手は「ありがとうございます」と先ずは答えてくれます。ところが、昔の選手は何も答えてくれない。あつたとしても「はい！」だけです。つまり、今はマイクを向ければ答えてくれる。どう聞き出そうか考えなくても喋ってくれるもので、インタビュアーのレベルが上がりません。疑問形で聞いていませんからなおさらですね。そして「シュートを打ったとき、どんな気持ちで打ちましたか？」と聞いても、余程のことがないかぎり選手はシュートを打ったときの気持ちなど覚えているわけがないですよ。なんでこのような聞き方をするのですかね。それこそ「シュートが決まった時はどういう気分でしたか？」なら分かりますけど。ホームランを打ったバッターに「バッターボックスに入っていた時にどのようなことを考えていましたか？」という質問をする人もいますが、そのような質問よりも「どんな球を打ったんですか？」「狙い球だったんですか？」答えから話を膨らませていけばいいのです。そして最後に、サッカーの場合は「サポーターの皆さんに一言お願いします」ということを聞きますが、ではこれまでは誰のために聞いていたのだということになりますよね。しかも、いつもワンパターンと思いませんか？

先日ドルトムントで行われた、日本代表対ボスニア・ヘルツェゴビナの放送を見ましたか？アップのショットが多かったですね。サッカーというのは、全体の動きで見ないと分からないんです。フォ

一メーションのスポーツでボールだけを追いかけられたら分けが分からないですよ。Jリーグが始まった93年ころによく見かけられましたね。昔、野球でも、ボールだけを追いかける手法がよくとられていて、ホームランかと思ったらキャッチャーフライだったということがありました。

94年のアメリカワールドカップで、西海岸と東海岸にはヨーロッパのテレビクルーが配置され、中央地帯を地元アメリカの放送局に任せて、国際映像を作りました。そしたら、サッカー文化が根付いていないアメリカの放送のクオリティが低くて問題になったことがありました。

また、84年のロサンゼルスオリンピックで、アメリカがつくった国際映像で問題になったものがありました。アンデルセンという女子マラソンの選手を覚えていますか？ゴール寸前、脱水症状でフラフラになったあの映像です。あっ！その前に一着は誰だか覚えていますか？アメリカのベノイトという小柄な選手です。では、2位の選手は知っていますか。それは僕も知りません。つまり、あのときの映像は、ベノイトがゴールをした後、カメラはずっとフラフラ・アンデルセンを追っかけていたんです。映像としては面白かったのですが、オリンピック委員会からすると大失敗の放送をやったことになってしまったんです。映像としての記録が残っていないのですよ。

あっ、だいぶ話が逸れてしまいました。なんかフォワードのシュートみたいですね！
まァ、いずれにせよラジオへの認識、関心を持っていただければ嬉しい限りです。

■地域に密着できるのはラジオ

さて、テレビでもラジオでも全国中継と言うのがありますが、これはある試合を全国ネットで日本全国へ同時に放送することです。例えばプロ野球ですが、かなり昔から、日テレさんが巨人戦を日テレのネットワークを使って全国中継を沢山やりました。今は差し替えと言って巨人戦を全国に流しても、関西地区だけは阪神の試合を差し替えて放送します。しかし、野球のテレビ中継が始まった当初は差し替えがなく全国津々浦々巨人戦だけだったんです。ですから、巨人ファンは東京だけでなく、全国にいるんです。野球をナマでみられないファンは巨人戦しか知らないのは当たり前なんですね。

ところが、最近メディアの数が増え各チームのフランチャイズで地元チームの中継をするようになってきました。その上、野球人気にカゲリが見えはじめたら、昨今「地域密着」を言い出したわけです。

さて、Jリーグは最初から「地域密着」を掲げています。しかも、チーム数も多く、全国に散らばっていますよね。今までプロスポーツに直接触れることが出来なかった地方の方が地元のプロチームがあれば当然、興味もあるし、ファンになって当たり前です。

つまり、言いたいのはその地域に合った放送が必要じゃないかということなんです。例えば、Jリーグの“広島 vs 大分”戦をNHKの衛星テレビで中継したとすればレッズサポーターが観るかということ。衛星放送は全国どころか韓国でも見えちゃうんですよ。「差し替え」はききません。地上波でも同じです。

ラジオでも、例えば“マリノス vs アントラーズ”戦をニッポン放送が中継したとしますと、関東一円に聞こえます。放送の独占権があるので“浦和 vs 新潟”戦は放送がありません。車を運転中の人、手仕事をしてる人、何とかレッズ戦を聞きたいんですがどうにもなりません。

整理すると、

- * 全国（国内全部）・・・・・・・・・・衛星放送、地上波TV
- * 地域（関東、関西）・・・・・・・・・・地上波TV、中波ラジオ
- * 県単位（各都道府県）・・・・・・・・・・地方局、山梨放送、大分放送、FM〇〇
- * 市・地区単位（仙台市、鳥栖市）・・コミュニティFM（ラジオ）

繰り返しになりますが、ラジオを使わない手はない。特に地元で密着しているコミュニティ放送を使わない手はありません。

鹿島アントラーズの社長さんが、是非ラジオ中継をやってもらいたいと言ってます。鹿島神宮駅に

電車が来るのは一時間に一本から二本くらい、タクシーがたくさん客待ちをしているんだそうです。例えばカシマスタジアムでゲームがあっても、仕事などで、その間、タクシーの運転手さんはタバコを吸いながらラジオを聞いているそうです。その彼らのためにもラジオ放送をやってくれと言うのです。帰りの客が寄りそうな店では、試合をやっている時間に仕入れをやっていて、その人たちもラジオを聞きながらなんですねえ！

テレビ全盛の世の中、みなさんにもう少しラジオを見直していただきたいのです。災害の時だけ注目するんでなく、もっともっとラジオを聞こうではありませんか？

ラジオを聞いたら行きたくなる。ラジオを聞いたら見たくなる。ラジオをもっと気にしてください。

■奉加帳の話

さて、レジュメの中に「奉加帳で中継」というのがあります。ちょっとご説明をしましょう！

少々、話は回りくどいのですが、昨年11月26日にFM湘南というコミュニティFM局がJ2の湘南対徳島のホーム最終試合を放送した例をご紹介します。

最初は、局側は、放送したいがスポンサーが見つからないのでできません、という話でした。そこで、多分に図々しいんですが toto センターの両角さんをお願いに行きました。

「両角さん！ toto がスポンサーになってくれませんか？」・・・ケゲンな顔、ちょっと間をおいて「高いんでしょう？いくら位かかるの？」

「実はたったの10万円で出来るんです。」・・・まさかア！と言った顔！

アーだコーだ話してるうちに「そのくらいだったら一度テストでやってみようか！」となりました。放送局側に見積書を頼んだら、「10万円と言ったのは、利益0で、ヘタをすれば赤字になってしまう。ゲストも入るし、20万円の見積りでお願いしたいんだが・・・？」

両角さんに言ったら「大丈夫！それくらいだったら・・・！」

当日の放送席にはゲスト解説に元日本代表のロペスさん、小生も末席に入り、実況は女子アナがやりました。

試合は13時キックオフ！なんです、現場の平塚競技場からしゃべりだしたのは、何と1時間前の12時からでした。試合開始まではロペスさんを中心にサッカーあれこれ！話が盛り上がったところで、ゲーム開始！

女子アナの実況がなかなかうまいんでビックリしました。明るいしゃべり、回しのうまさ、肝心の実況も抜群でした。

そして、試合終了した後、両チームの監督会見の生中継もあり、結局、現場終了は3時半を回っていました。

勿論、totoのコマーシャル、クレジット（提供名）は試合の90分間だけでなく、12時から3時半までの3時間半も toto 一色でした。20万円で大サービスじゃないでしょうか？

もひとつ、付け加えれば1試合のスポンサー料金が20万円なら、J2の場合、ホーム24試合にかかるスポンサー料金は年間480万円で出来ちゃうんですね！

どなたかスポンサー、探してくれませんか？個人でスポンサーになってもらっても構いませんよ！

そこで出てくるのが「奉加帳」の話なんです。実際、この方法で放送した湘南FMの例ですが、チームの後援会の方々に“小遣いの中から1万円をご寄付願えませんか？”と声をかけたところ、アツと言う間に10人の方から10万円が集まり、中継が出来ました。

また、FM調布がやった方法ですが、地元企業にスポンサーをお願いに行くと“広告費は支店じゃだめで、本社の方でやってください。”と言われるそうです。支店決済が出来ないんですね。じゃ、本社に行ってスポンサーをお願いすると、広告効果、費用対効果など必ずきかれます。まだ認知度の低いコミュニティ局には厳しい反応です。そこで思いついたのが、「夏祭りのご寄付」方式なんです。今、巷でよく言われている企業の地域還元、メセナと言われるのを利用することでした。つまり、支店長

さんのところに行って“サッカー中継で地元の皆さんに楽しんでもらいたので・・・ひとつご寄付を！”と話しをすると、10万円くらいですと結構出してもらえます。

その他、地元商店街、個人商店、時にはチームからお金を出して放送してもらってもいい訳です。

結構、考えるとアイディアは出て来るもんですね。もっとも、局側の方も認知度を上げなければスポンサーはつきません。スポンサーがつかないから放送が出来ないでは、いつまで経ってもラチがあきません。少々赤字覚悟で放送すべきだと思いますがね。

■質疑応答

中塚：テレビでたくさん放送したら人々が競技場に見に来なくなるのは嘘だという論説があります。

つまり、テレビでたくさん放送することで人々の関心は高まり、逆にスタジアムはいっぱいになるという説で、それを裏付ける統計も出ているという話ですが、いかがでしょう？

小林：確かにドイツのサッカーチームのGMに聞いたら、どんどんテレビで流せと言っています。テレビで沢山放送すれば、サッカーを知らない人がサッカーを知り、次はナマのサッカーを見てみようとなるのも事実です。一方、家でくつろぎながら、テレビを見るという人口が増えているというのも、事実としてあります。どちらが正しいのかは分かりません。

一例として、野球ですが、アメリカのメジャーリーグでは、そのチームのホームタウンでは地上波テレビはありません。つまり、ロサンゼルス・ドジャースの地元、ロサンゼルスでは見られないんです。もっとも、お金を払って見られるペイテレビでは見られます。主旨は、ナマで見てください、それにはドジャース・スタジアムへ来てくださいますと言っていることです。

加藤：ラジオを1試合中継すると10万円かかるということは、まとめて契約することで事業になりますか？

小林：まず、なりませんね。スポンサー料金として放送局にはそれなりのお金が入りますが、Jリーグには放送権料として数パーセント入るだけで、どうでしょう？年間全試合を中継したとしてもトータル1億円までいきません。経済的事業というより広報事業でしょうか？

くどいようですが、Jリーグにとっては損はせずにサッカーの普及、宣伝には手ごろで使わない手はないと思います。それに補足として試合だけでなく、各チームの情報や選手のナマの声も伝えられます。今や携帯電話でどこからでもナマの声を入れられます。機動力は抜群にいいですね！

北岡：選手がインタビューされてよく言うことは、新聞は絶対に嫌だ。言ってもいないことを書かれるから。テレビは次に嫌だ、切られるから。その点、ラジオはそのままだからいい。

相原：マルチスタジアム中継について教えてください。

小林：「マルチ」と言うだけあって、1試合1会場の中継でなく、複数のスタジアムを結んで中継することです。よく耳にされると思いますが、二元中継とか三元中継とか言いますが、いわゆる多元中継のことをカッコよく「マルチスタジアム中継」と言ってるんです。アナウンサーを各会場に配置して、点が入ったらそのスタジアムを呼び出して得点状況を説明する。本来、放送ラインを設置、ちゃんとした放送席を確保するんですが経費も時間もかかります。今や、座席ひとつと携帯電話でやってます。携帯電話が普及したことで随分便利になりましたね！

それに、放送ラインも光ファイバーが主流になったため、海外からも簡単に、しかもタイムラグ、時差がなくなりました。

相原：どういう時にマルチスタジアム中継をするのですか？

小林：注目カードが複数ある時、優勝がかかっている試合などです。ニッポン放送がこの『マルチスタジアム』と銘打って始めたのは、totoにあわせてです。同じ開始時刻のスタジアムにレポーターを配置してゴールの度に呼びかけました。ですから、サッカーは点が入らないし、入っても少ないと言われていましたが、90分間に点が入ること、入ること・・・！（笑）

北岡：野球中継では、雨で中断や中止のとき、メインの試合が早く終わった場合に、他の会場に回したり、切り替えたり、多元中継を行うこともあります。

小林：ところで、みなさんは放送のなかでどのようなことが一番印象に残ると思いますか？

勿論、スポーツの迫力ある場面、ドラマの涙を誘うシーン、いろいろあると思いますが、実は、意外にも放送ミスなんですねえ。映像が出ない、音が出ない、カメラの切り替えミス、アナウンサーがトチったとき、沢山ありますね。

■文化について！

放送文化とかサッカー文化という言葉があります。日本は教育大国だとか経済大国だとか言われていますが、こと文化に関してはヨーロッパなどにはとてもかないません。南米でさえ、文化が非常に高いんです。元代表監督の加茂周さんから聞いた話ですが、代表監督を解任された直後の97年12月にアルゼンチンへ視察というかお忍びでサッカーを見に行きました。12月といえばアルゼンチンは夏ですよ。ある試合をスタジアムの貴賓席に入れてもらって見たそうです。総ガラス張りの貴賓席はクーラーが効いていて、高級なソファが置いてあって、中央には沢山の果物や飲物があり、自由に飲み食い出来る快適な場所でした。外の暑さや音も遮断されていました。ところが、いよいよ試合が始まるという直前になったら、回りのガラスがスーッと下がってなくなったそうです。途端に熱気と歓声が入ってきて、一般のスタンドと同じ状態になったそうです。そして、ハーフタイムになったらガラスがセリ上がり、冷房が効き始め、快適そのものだったとか。アルゼンチンの経済状態はあまりよくありませんが、サッカー文化は凄いもんだよ〜と加茂さんは感心していました。

日本のスタジアムはと言うと、横浜国際は7万人入るけど、一番前は看板で前が見えない。一階席の一番上、太いコンクリート製の柱のそばの席はピッチの隅が見えません。実際は7万も入らないじゃないかとおもいますよ。また、広島ビッグアーチはメインスタンドの真ん中に貴賓席があるんですが、一般席との境界の壁が高く、その横に座ると、メインスタンドの真中にいるのに、コーナーどころかゴールが見えない。前に通路がある席や最前列の席に座ると、手すりが目線なんで、ゲーム見るときは伸び上がったりがんだりしなければなりません。

放送席についても一事が万事ですね。2002年のワールドカップの時に新しく造ったスタジアムの放送席も、ご多分に漏れず、変更させるのに一苦労しました。設計図を見せてもらおうと、殆どがガラス張りでエアコン付き、肘掛けがついたソファのような席で、快適で良いでしょ！とよく言われました。私たちは快適でいる必要はなく、みんなと一緒に汗もかきたいし、風も感じたいのです。それであれば、臨場感だ、迫力のある放送が出来るはずありません。

結局、札幌ドーム、鹿島スタジアム、埼玉スタジアムに、後から出来た味の素スタジアムも変えてもらいました。お役所を説得するのは大変なことで、半分ケンカ腰でやっと変えることが出来ました。ガラス張りの放送席は、放送局は嫌います。もしガラス張りなら空き部屋になりますよと忠告したにもかかわらず、設計図どおり造ってしまった宮城スタジアムは、4年後の今でも空き部屋だそうです。聞くと、宮城スタジアムそのものを取り壊す云々とか・・・！

自虐史観じゃありませんが、日本のスポーツ文化はやはりかなり遅れていると思いませんか？

オフレコの話も出てきましたので、この話の続きはルンへと。

■最後に小林さんから一言

話が逸れてまとまりがありませんでしたが、なんとなくラジオっていいもんだなあということが分かっていただけでも有難いし、これからもチョットだけでもラジオに注目、関心を持っていただければ嬉しい限りです。

ご清聴有難うございました。

以上

(J. LEAGUE NEWS 2002. 3. 31 から転載)

小林達彦 こばやし・たつひこ

サッカーパーソナリティ。1940 年生まれ。神奈川県出身。早稲田大学卒業後、63 年に RKB に入社。69 年ニッポン放送入社。兄の影響で小学生からサッカー、野球、バレーボール、ゴルフ等、ちょこちょこやっていたが、あくまでも草サッカー！ 71 年ミュンヘンオリンピックサッカーアジア予選の中継、84 年のロスオリンピック中継担当（主にバレーボール）。高校サッカー中継は約 20 年以上担当。FIFA ワールドカップアメリカ大会、フランス大会取材。2000 年に定年になるが、サッカーパーソナリティは継続。サッカーネームは“ペレコバ”。

いやあ、もう 10 年とは、ホントに早いですね。ついこの間スタートしたと思った J リーグも早 10 年。10 年一昔。この間の J リーグの効果は大変なものです。その 10 シーズン目に丁度、ワールドカップが行われるのも何かの因縁のような気がします。

ところで、私が関わってきたこの 10 年、放送の中でもラジオについてお話したいと思います。

10 年前のラジオのスポーツ中継と言えばプロ野球が中心で、スポーツアナウンサーは全員が野球の実況ができることが当たり前。サッカーが喋れるアナウンサーは各局一人か二人、ほとんどいない状況でした。従って最初に手がけたのは、実況アナウンサーの育成でした。下手でもなんでも半強制的に担当させ、実践訓練で近年やっとそれなりに格好がついてきた次第です。

最初の頃は、ルールが判らなかつたり、用語がサッカーでは使わないものだったり、聞いていても何をやっているのか判らないなんてことがたくさんありました。もっとも聞く側の方も、野球ほど知識がないものですから、正直あまり苦情はありませんでした。テレビで話題になったあの「ゴオーール！」と絶叫することも、ラジオではさほどクレームはありませんでした。

中継のスタイルの方も一試合のみのフル中継、あるいは二元中継くらいで。ま、今のテレビ中継と同じだったんです。

ところが、2~3 年前、toto が始まることが決まってから、ラジオ中継はガラッと変わりました。つまり、ラジオの機動性、手軽さなどから、toto 用に全試合をカバーしようということになり、いわゆる多元中継、マルチ中継をするようになりました。

特に toto が始まった昨年は、このマルチスタジアム中継がなかなか好評のようでした。全会場の得点が即座にその会場からレポートされるので、ラジオを聞く限り、得点がたくさん入ります。サッカーは得点が少ないなんて、真っ赤なウソ！ toto シートを片手にラジオを聞くと、迫力、スリルがリアルに伝わり、一度聞いたら病みつきになること請け合いです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

最後に、実況中継でないトーク番組について一言。

皆さんは、たとえばあの岡ちゃんこと前日本代表監督の岡田武史さんやジュビロ磐田の名波浩選手にどんなイメージをお持ちですか？

岡田さんは理論家で物静か、名波選手は口数が少ない実直な選手、とあっていらっしゃるでしょう。しかし、ラジオのインタビューやトーク番組に出演されると、何の何の、結構お喋りだし、冗談も多く、テレビなどで受けるイメージとは違って大変明るく面白いキャラクターなのにはビックリさせられます。これもラジオならではのイメージかと思っています。

ラジオを聞くとホントの姿が見えるんです。これがホントの「耳寄りな話！」。

J リーグ 10 年、もう一度ラジオを注目して下さい。論より証拠！ いや、音より証拠！